

宇多良炭鉱：その繁栄と滅亡

西表島北西部の採掘資源である石炭は、19 世紀後半に多く求められた。日本の工業化が進んだことにより、マラリアによる鉱員の健康の低下にも関わらず、1886 年から炭鉱が近くの内離島で推進されていた。

宇多良炭鉱は、西表島で 1930 年代に開鉱し、海外進出のため天然資源を求められ、マラリア対策をしつつ、西表周辺の島の中では最大の炭鉱になり、1000 人ほど雇用するまでに拡大した。非常に搾取的な方法で、労働者を甘言などの約束で集められたものの、長時間働き、賃金の代わりに金券での支払い、逃亡しようとするものは厳しい罰が与えられた。第二次世界大戦中は、海上輸送路が立たれていたため、鉱員は徴兵され、炭鉱は 1943 年に閉山した。